
転生先は...ヘタリアの世界!?

翠風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生先は…ヘタリアの世界！？

【Zコード】

Z2776Y

【作者名】

翠風

【あらすじ】

交通事故で死んだ少女…時鐘 聖羅。だが、彼女が死んだのはどうやら間違いだつたらしい。死後の世界で不思議な光にそう知られる聖羅。そして光は聖羅を別の世界へ転生させてくれると言った。その後、転生した彼女がいた世界はなんと国が擬人化されたあの世界だった！？しかも、あの兄弟の妹！？ お話は基本アニメ沿い＆ほのぼのです。作者は初心者です。また、亀更新になると思います。どうか温かい目で見守り下さい。

プロローグ？（前書き）

初心者で駄作者の人間の書いた駄作品で良ければ、お読みください。

プロローグ？

……「」はどこだろ？

気がつくと私は一人で倒れていた。周りを見渡すと、そこは何もない真っ白な空間だった。取り敢えず、何かないか見るために体を起こしてみる。

私『痛たたた…』

どこかでぶつけたのだろうか？頭がガンガンする。まだはつきりしない頭で何があったのか考える。しばらくして、カチッと頭の中で全てのパズルのピースがはまる音がした。そして私は全てを思い出した。ああ、そうだ私は…

私『私は死んだんだ…』

何もない空間に少女の澄んだ声だけが虚しく響いていた。

あの日私はいつも通りに普通に学校へ行き、普通に「家」へ帰っていた。」家」と言つても孤児院だが……。

10歳の時に交通事故で両親を亡くした私にとって、孤児院は家同然だ。

まあそんなことはさておき、つまりあの日、私はいつもと何ら変わらない1日を過ごしていた。

紗弥加「もう本当、テストって嫌だよねー。」

琴美「だよねー。聖羅はどう思つ?」

私『私?私はそうでもないけどなー。』

二人「ええーー!?

私『そんなに驚かなくてもいいじゃん!』

…とまあ、他愛もない話をしながら友達と下校していた。ちなみに、紗弥加と琴美は同じ孤児院で一緒に住んでいる家族だ。

私『あつ、『めん!私、今日本屋によつて帰るから、先帰つてて。』

紗弥加「んー?何買うん?」

琴美「分かった!ヘタリアでしょー!」

私『正解。』

紗弥加「そつか！ そういうえば聖羅、まだ買っていないんだつたね。」

私『うん。』

琴美「ヘタリアって言つたら、やつぱシンジコレ紳士でしょ。」

聖羅『…イギリスさんのこと…』

琴美「Y e s。」

琴美が親指を立てて答える。

紗弥加「何いきなり英語使つてんだよーそれにヘタリアと言つたら
ハンガリー姐さんだろ…。（ベシッ）」

そんな琴美に紗弥加がすかさず、ツツコミを入れる。

琴美「痛つ、叩かなくともいいじゃん…！」

紗弥加「だつて、うざかつたんだもん。」

琴美「うわーん、聖羅ー（泣」

琴美は半泣きになりながら私に抱きついてきた。

私『えーっと…。よしよし。』

私も琴美の頭を撫でてあげる。

紗弥加「てめつ、私の聖羅に手え出すんじゃねーよ。」

そう言つと、紗弥加は琴美を私から引き剥がした。

琴美「ブー。… そいえば聖羅、本屋は？ 行かないでいいの？」

私『あつ…、そだつた。じゃあ、2人ともまた後で。』

琴美「OK」

紗弥加「了解。」

私『ばいばい。』

二人「バイバーイ」

…。
それから私たちは別れた。それが永遠の別れになるとも知らずに

私は『よかつた』、まだ特装版残つてて。』

私は二人と別れた後、すぐに本屋へ行き、ヘタリアの最新刊を買つていた。

私は『ん？あの車、やけに速いな…。』

今は、歩行者用の信号は青。車用の信号は赤である。にもかかわらず、向ひから来る車は一向に減速する様子はない。

私は（もしかしてあの車、信号無視する気なんじや…）

そんなことを考えていると、隣を8歳くらいの女の子が走つて行つた。車には気付いていないようだ。

私は『！？・・・危ない！…』

私は思わず女の子の所へ行き、その子を突き飛ばした。そして私は車に跳ねられた。

私は『つ…！？』

跳ねられた私の体は勢いよく宙を舞つ。女の子は無事だろつか？
そう思い、私はあの子の姿を探す。

いた。…どうやら無事のようだ。

私
よかつた

こんな状況なのに、私は安堵の息をつく。私はそのまま道路に叩きつけられた。だが、痛くはなかった。

私（体が麻痺して、感覚まで駄目になつたか…）

なに冷静に状況を整理してるんだろう、と我ながら呆れる。

私（あ～あ、皆懲しむかな。特に紗弥加と琴美は…）

私は麻痺してうまく動かない腕を何とか動かして、最後に皆へのメッセージを書いた。…もちろん、私の血で。

私『…書け…た…』。最後の一文字を書くと、私は意識を手放した。

もう動かない少女の手の近くには赤い字でこう書いてあった。

【おつがとう】

と…。

そして、現在に至る。

私が『これからどうすればいいんだら?』…

最初に言ったようにここには何も無い。私の推測が正しければこれは死後の世界というものだらう。ただ…。

私が『てつまつ神様でも居ると思ってたんだけどなあ。』

誰もいない。

私が『……よし。』

なんだか落ち着かないで、歩き回ることにした。もしかしたら誰かに会えるかもしれないし。

私『本当に誰もいなー…』

あれからしづらへ歩いてみたが、相変わらず真っ白な空間が広が
つている。

私はその場に座り込んだ。

?..?..?す..?ない。私『!..?』

こわなりびこからか声が聞こえた。

私『…一体ビコから?』

周りには誰も……あ、いた。というかあった。

? ? ^ ... すまない。 <

私の目の前には金色に輝く光が浮かんでいた。

光? ^ すまない。 <

確かにその声は、私の目に浮かぶ光から聞こえていた。

私『なんで謝つているんですか?』

光がしゃべつてることに驚くも、私は疑問に思いその光に問い合わせた。

光? ^ そなたはまだ死ぬべき人間ではなかつたのだ...。 <

私『?』

私は光?さんの言つていることが分からず、頭に?を浮かべる。

光? ^ その...つまり、本来死ぬべき運命にあつたのはそなたが助けた子どもで（私『要するに私と私の助けた女の子の運命が入れ替わつた...と?』 !?... そうだ。 <

私（なるほ）。

私『で、どうしてあなたが謝るのですか？』

私はまた問いかけた。

光？「それは、本当なら入れ替わった運命もすぐに直せば元に戻せるのだが、私が気が付いた時にはもう遅く、戻せなかつたのだ…。本当にすまない。」

少しの間、沈黙が続いた。

私『…いいえ。むしろ、ありがとうございます。』

光？「！？」

光？さんは私の言葉に驚いていたようだが、私は構わずに続けた。

私『逆を言えば、あなたがミスしたお陰で私はあの子を助けられたんですね？だったら、私はあなたにお礼を言いたいです。…ミスしてくれてありがとう。』

私は光？に向かつて頭を下げた。光？…そなたは優しいのだな。

<

私『えつ?』

光?>礼と言つてはなんだが、次そなたが生まれる世界はそなたのよく知つてゐる世界にしてやろう。それと、いくつか特別な力をやる?...<

私『どういふことですか?私の知つてゐる世界つて。それに特別な力つて?』

光?「そのうち分かる。」

光?さんがそつと私の体は輝き出した。

私『あのつ、あなたの名前は?』

光?>我は生と死を管理する者の一人。まあ、人間は天使と呼ぶが。名は...ジユエ<

私『ジユエさん、また会えますか?』

ジユエ>...もし、そなたがどうしても我的力を必要とするなら、その時は手を貸してやる?...<

私『ありがとうございます。』

ジユエ>では、さりばだ。...聖羅。<

私『はい?』

ジユエ>頑張れよ。<

私『…はい!』

一瞬、一面が眩しい光に包まれた。次の瞬間にそこにはもう少女の姿はなくなつた。

ジユエ>彼女に幸あれ。<

やつ語りつじユエはどうかへと姿を消した。

真っ白な空間はまた元の静けさを取り戻していた。

プロローグ？（後書き）

次は転生してすぐの話です。

プロローグ？（前書き）

転生してすぐの聖羅の話です。新しい世界で新しい家族に出会います。

プロローグ？

聖羅 side

私『うーん。うーん。』

今、私は草原（？）らしき場所の、ど真ん中に立っている。気が付いたら、ここにいたのだ。

私『それにしても、このふく… みおぼえがあるような気が…』

今私が身に付けているものは白い服、白い帽子。そして…。

私『わたし、ちこちくなつてゐよな？』

そう、私は小さくなつていた。そのせいだろつか？喋りが片言になつてしまつ…。

私『みゅ～…。』

なんか、変な声が出た。ヘタレで有名なあの兄弟みたいだ。そして、気が付いた。

私『ぐるんがついてる！？』

しかも、あの兄弟の兄の方と同じ向きだ。

それからしばらく一人でウンウン唸つていると…。

? ? 「おお、こんなところにあったのか！？」

後ろから突然、声を掛けられた。

私『！？』

私は反射的に近くにあつた大きな岩の後ろへと隠れる。

? ? 「そんなに驚かなくともいいじゃろ。」

私は恐る恐る顔を岩から出し、その人の顔を見た。

『私!?』（…ローマ帝国!?）

私は驚きながらも、何とかその人に話し掛けた。

私『おじちゃんはだあれ？（まさか、そんなわけないよね？）』

そう思いながら、私は問いかけた。だが……

「えへ～」ローラー～英國～……お前のねこがや

私『おじちゃんはわたしのねじこじやん?』

一ノマニツイハセト

私

「ローマ帝国」。

しばらく沈黙が続く。

ローマ帝国「あり、セビージャーーー（パサンシ）」

私『…？（びへつ）』

これなりローマ帝国は手を呴いて、大きな声を出した。

ローマ帝国「そういえば、お前の名前を教えてなかつたの？」

私『わたしのなまえ？』

ローマ帝国「そうじやよ。」

ローマ帝国は「口」ながら私を抱き上げた。

ローマ帝国「お前の名前は…シチリアー。イタリア・シチリアー
ノジヤ」

私『わたしは…しちりあーの。いたりあ・しちりあーの…。』

ローマ帝国「どうじや？氣に入ってくれたか？」

ローマ帝国は少し不安げな表情で私を見つめてくる。

私『…うん…きたこいつたよ。あつがとう…うーまあじこちゃん。』

私は笑顔で答えた。

ローマ帝国「そつかー、氣に入ってくれたか！…そりゃー良かつた。」

ローマ帝国「もとこ、ローマおじいちゃんも笑顔になつた。

ローマ帝国「そひと、そろそろ行くべかの？」

ローマおじいちゃんは私を自分の肩に乗せると立ち上がり、ビームと歩き出した。

私はおじいちゃんに囁まりながら聞いた。

ローマおじいちゃんがいるの？」

ローマ帝国「お前さんの兄たちの所へ行くんじよ。」

ローマおじいちゃんは嬉しかった答えた。

私は『わたしつつておじいちゃんがいるの？』

ローマ帝国「ああ、一人いるだ。」

おじこひさんまつぱつ嬉しそうだ。だいぶちがひこじめ

ローマ帝国「まず上の兄のイタリア・ローマへは廻。そして下の兄のイタリア・ヴェネチアーノは北じ。や」

私『へへ、やうなさ。だが』（これまか）「世界確定かな……。』

なんてことを考えながらローマおじこひさんと話してみると、田的地上に着いた。

ローマ帝国「おっ、いたいた。おーい、お前たち一妹を連れて來たぞ。」

私の視線の先には、ちびたりあとひびローマがいた。ローマおじこひさんと話してもう、私は一人のところへ走った。

私がはじめまして。わたしはイタリア・シチリアーです。これからおじこひさんと話してもらひ、

ちびたりあ「うふ、よひしく。ボクはイタリア・ヴェネチアーノだ

『

ちびローマー、「…イタリア・ローマ…。よひくだ、こんせん

一。』

まずは血口紹介。名前を知つてはいるとはいいえ、初めて会いのでは
つぱりちやんとしなければ。

私『…ねえ、ヴュネチアーノおにこちやん。』

ちびたりあ「なあに?」

私『ヴュネチアーノおにこちやんの」と、ガニースおにこちやんつ
てよんでいい。』

ちびたりあ「いいよ。じゃあボクもシチリアーノの」と、シチリ
アつてよんでいい?』

私『うん!』

取り敢えず、ちびたりあとは仲良くなれた。

ちびロロマーノ「……。』

そんな様子をちびロロマーノは羨ましそうに見ていた。

私(あつ…ちびロロマーノがいじけてる。)

私『ローマーへおひこかけなんー。』

私『えへへ。ローマーおひこちゃんとわたしのまえがみつておもろいだね。』

ちびたりあ「あつ、ほんとだ！いいな。」

ちびローマー「なつ……、べつ、べつにうれしへなんかねーぞ！」
元やう一。『

せう言こながらも顔を真っ赤にして嬉しそうにローマー。

私（良かつた。機嫌が直つて。）

私『あらためて、これからよろしくね。ガムニスおひこちゃん！ローマーおひこちゃん！』

それから二人で遊んだ。

そんな様子をローマ帝国は瞬じかく見つめていた。

私『ローマおひこちゃん！』

私はおじこちゃんに飛びついた。

ローマ帝国「おうと…。」

わすがローマ帝国。私を上手へ受け止める。

私は『おじこひやんもこうしょにあそぼーみーー。』

ローマ帝国「よし、分かった! ジーちゃんが遊んでやるわ。」

それから私たちはたくさん遊んだ。

そして私の新しい生活が始まった。新しい家族と共に。

プロローグ？（後書き）

次の話はオリジナルキャラの設定です。

設定（前書き）

オリジナルキャラ達の設定です。
かなり高い確率で、編集し直すと思います…。
すみませんm(ーー)m。

設定

設定
転生前

名前：時鐘 聖羅

誕生日：3月17日

年齢：16歳（早生まれなので高校2年生）

容姿：へしにがみのバラッド。くのモモを黒目、黒髪にした姿。男女どちらからも可愛がられていた。

身長：162.5cm

性格：優しくて、真面目。頭が良い。運動神経は中の上くらい。天然で、ものすごく鈍感もある。少し人見知り。オタクだが、普段は隠している（いわゆる隠れオタク）。ヘタリア大好き。ボカロも大好き。腐ってはいない。

転生後

名前：イタリア・シチリアーノ

国名：イタリア（シチリア半島）

基本、皆からは「シチリア」か「シシリー」と呼ばれている。シ

チリア半島は、イタリアの地図を長靴の形として見たときに、長靴の先端にある所。

誕生日：3月17日

容姿：見た目は転生前と同じだが、髪と目は栗色になり、くるんがついた（ロマーノと同じで右）。服もロマーノのと同じ軍服。

身長：162.8cm（少し伸びた）

性格：基本は転生前と変わらない。だが、イタリア化して人見知りが直った。兄たちとは違いヘタレじゃない。むしろしつかりしている。お酒を飲むと、性格が変わる…。キレると怖い。転生してから特殊能力がついた（詳しくは本編で）。

歴史：

- 前3世紀：ローマ帝国の一部
- 9世紀初頭：アラブの領土
- 1130年：シチリア王国（独立）
- 12世紀末：プロイセン領
- 1268：フランス領
- 1282：スペイン王国領
- 1713：オーストリアに併合
- 1734：スペイン領
- 1800年頃：イギリスに支援されて、フランスの勢力圏外になる
- 1816：両シチリア王国（再びスペイン領に）
- 1861：イタリアに復帰

今のシチリア半島・マフィアがいる…。なのでシチリアとロマーノが協力して、どうにかマフィアを無くそうと日々頑張っている。そ

のためか、シチリアの戦闘能力はかなり高い。最近、石油が発掘されたので石油科学工業進んできている。漁が盛ん。環境はあまり良くないが、オリーブ・オレンジ・レモン・ブドウが広く栽培されている。その為、ワインやオリーブ油が作られる。

名前：桜坂 紗弥加

誕生日：7月21日

年齢：17歳（高校2年生）

容姿・黒目、黒髪の純日本人。髪は肩くらい。顔立ちが整つてあり、美人。

身長：165・3cm

性格：ツツコミ。姉御肌。運動神経抜群。8歳の時に孤児院に来た。オタク。ハンガリーに憧れている。

名前：琴美・K・レクサス

誕生日：9月24日

年齢：17歳（高校2年生）

容姿：瑠璃色の目に、茶髪のハーフ（母は日本人、父はアメリカ人）。髪はロングで、普段はツインテールにしている。

身長：158・7cm

性格：甘えん坊。ボケ。

6歳の時から孤児院にいる。オタク&微腐。ボケなのに頭が良い。ツンデレキャラが大好き。

名前：ジュエ・B・セラファイム

年齢：？？（見た目は20歳前半くらい）

容姿：基本は光の姿。たまに人の姿になる。人の姿の時は、テイルズ・オブ・シンフォニアのクラトスの姿になる。翼の色は純白。

身長：178・6cm

性格：真面目。ストイック。穏やか。

設定（後書き）

次はアニメ第一話であった「世界会議」のお話です。

第一話 世界会議
 会議は踊るー・>br> (前書き)

アニメ第一話の世界会議です。

第一話 世界会議 & 1st・会議は疎かー・& ppt・；

シチリア side

アメリカ「よし！」これから世界会議を始めるぞ。世界中の問題をみんなで一つ一つ解決していく。ううじゃないか。難しい問題もオレたちが力を合わせれば、きっといい方向に行く！君たちの率直な意見をぜひここで聞かせてくれ。」

私（よく息が續くな…。）

現在私は世界会議に参加している。ちなみに、私の席はロマーノお兄ちゃんヒューースお兄ちゃんの間だ。

アメリカ「じゃあまずオレからいぐぞ。今話題の地球温暖化だけ、でっかいヒーローをみんなで作つて地球をガードしてもらえばOKだと思うんだよー。ちなみに反対意見は認めないぞ。」

日本「私はアメリカさんの意見に賛成（スイス「またか日本！自分の意見をはつきり言え…。」

イギリス「俺は反対だ。そんな現実味の無い案受け入れら（フランス「じゃあお兄さんはアメリカとイギリスに反対つて」と「どうちだよ…。」

ベシベシッ、ポカポカ バシッ

只今、フランス兄さんはイギリスさんとアメリカさんに叩かれて
います。

中国「またあるか。お前らいつまで経つてもガキのままじゃねえあ
るか。少しば大人になるよろし。菓子やるからこれでも食つて落ち
着けある。」

中国さんが三人を止めようとしています。

イギリス・フランス「それはいらない。」

断られてしまいました。

スペイン「なあ、ロシアは何か意見言わんの?なんかあいつら言い
たつてやれや。」

ロシア「え?僕?僕は……リトアニアが困つて困つて僕に泣いて懇
願する姿が見たいな。」

リトアニア「…………。（ガタガタ）」

ロシア「ワトビアだつてそう思ひよね?」

ワトビア「……。(ガクガクガクガクガクガク)」

私(ロシアさん)。ワトビア君、ものすゞく怯えています。ベラル
シヤニモ癪をなこ下せ。)

一人を止めよつと思い私は口を開けよつとした。でも…。

ヒストニア「ロシアさん。弱い者じめは良くありませんよ。」

ヒストニアさんに先を越されてしまった。

ロシア「わ~。君それすぐムカつくよ~」

ポーランド「そこまでだしー。これ以上近よると、ポーランドルー
ル発動でお前の首都がワルシャワになるしー。」

ポーランド君はヒストニアさんの前に立ち、ロシアにさんとそつ
宣言していた。

私(ポーランド君はヒストニアさんと本当に仲がいいな~。)

ワーワーギャギヤー「ワザワゲシバタバ
タドオーン

ディッシュさんがふるふるしてきました。しかし、醜いが取まる気配
は全くあつません。

私（まづいかも…。）

私『ねえ、ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノ「何だ？」

私『耳ふさいでた方が良いかも。』

ロマーノ「は？」

私『私の予想では、もうすぐディッシュさんの堪忍袋の緒が切れると思
うんだ。』

ロマーノお兄ちゃんは一瞬、何を言っているんだ？とこつ顔をし
たが、少しして私の言った言葉の意味が分かったよつこ「ああ。
」と言つて耳をふさぎだ。

イタリア「ウホー？ なんで兄ちゃん耳ふさいでるの？」

ロマーノお兄ちゃんが耳をふさいだのを不思議に思ったヴァニスお兄ちゃんが話し掛けってきた。

私『ヴァニスお兄ちゃんも耳ふさいでた方がいいよ。』

イタリア「カニ? なんでなんで?」

私『すぐに分かるよ。』

イタリア「?? 分かってた?。」

セツ『うつと、ヴァニスお兄ちゃんも耳をふさいだ。そして私も。』

私(ドイツさんが怒鳴るまであと... 3、2、1、0)

ドイツ「お前ら黙れ...。」

まるで私のカウントダウンが聞こえたかのように、一度いいタイミングでドイツさんが怒鳴り出した。耳をふさいではいたが、私たち3人は共にびくつ、となってしまった。

私『はは...。さすがドイツさん。耳をふさいだたにもかかわらずこの迫力。見習いたいな...。』

イタリア「ヴェー！？ダメだよシチリアー・ドイツみたいになつたりやせ
だー。」（泣）

ロマーノ「そだぞ！あんなジャガイモ野郎を見習つんじやねー。
（怒）

お兄ちゃんたちは一人共簾て出した。

私はわ、分かつたから一人共落ち着いて。ドイツさんの話聞いひへ
ね？」

イタリア「…うん。」

ロマーノ「ちつ、…ああ。」

ドイツ「——意見したいやつは明確なデータを最初に提示しろ！
話はそれからだ！一人持ち時間は8分厳守！時間切れも私語も一切
認めん！さあ、最初に発言するやつは覚悟を決めてから手を挙げる
よ！」

ふわふわ～

私は隣…ヴェニスお兄ちゃんが手を挙げる気配を感じた。

ドイツ「では発言を許可する。…イタリア！…」

イタリア「……パアスター~~~~~」

第一話 世界会議 & It・会議は踊る・& ppt・（後書き）

次はWW?でイタリアとドイツが出来たお話を。

第一話　WW? ～全ては「」から始まった?～（前書き）

イタリアとドイツが出会います。
シチリアの出番が少ないです…。

第一話 WW? ～全てはここから始まった～

ドイツ side

時はWW?

俺はかのローマ帝国の孫、イタリアの国境を越えていた。だが…

俺「…おかしい。」

俺の手の中にあるのは銃…ではなく、

俺「木の棒一本で樂々国境を越えてしまつたぞ…。」

そう、ただの木の棒であった。

俺「まさかこんなヴァルストを食つ余裕がある国境越えは初めてだ。敵を見かけてもそそくさと何処かへ行つてしまつし…。これは夢か?いや、しかし油断はできん。やつのことだ、きっと策を練つてあるに違ひない。」

俺は周りを警戒しながら森をすんずん進んでいった。

俺「ん？」

場所は変わってシチリア半島

シチリア『ふう、やつと2／3が終わった。』

シチリアの机の上には書類の山が一つできていた。

シチリア『ヴェニスお兄ちゃん大丈夫かな…。まさか、ドイツさんに見つかって「ボクはトマト箱の妖精だよ。」なんて言つてないよね？』

イタリアの森の中

俺「ふむ、なぜこんなところにトマト箱が？」

俺は箱を木の棒で叩いてみた。

「？？」「うわっ！？」

俺「！？うわっ！」

？？「や、やあ！ボクはトマト箱の妖精だよー。
き、君と友達になりに来たんだー！一緒に遊ぼーーー！」

シチリア半島

シチリア『うん、そんな訳ないよね さてと、早くこの仕事を片付
けなきや。』

そういうと、シチリアは残りの書類へと手を伸ばすのだった。

イタリアの森の中

イタリア「うわあーー！」めんなさこ『めんなさい。オレ、トマト箱
の妖精なんかじゃないんですよーーー！（泣）

俺「！？！？」

俺が無理やり箱を開けると、中から茶髪の優男が泣きながら謝つてきた。

イタリア「マジで撃つのは勘弁してくれ……何でもするから撃たないでー（泣）

何でもするから……何でもするから………

「…

シチリア半島

シチリア『ん？今、ヴェニスお兄ちゃんの泣き声が聞こえた気が…。気のせい…だよね？』

イタリアの森の中

俺（いやまさか、いくら何でもこれはないよなーこれは。でもだつたら）「こいつは一体何なんだ？」

俺は泣きながら謝つて いる優男を片手で持ち、ぶら下げていた。

俺「…一つ質問がある。前は本ヨーローマの子孫とこいつつか？」

それまでずっと「『めんなさい』や「パスタ」を繰り返して泣いていたイタリアが泣き止んだ。

イタリア「えつ、ローマじいちゃん知ってるの？オレはローマじいちゃんの孫だよ。パスタとピザが大好きなお茶目さんです。」

それから優男…もといイタリアは笑顔になった。

イタリア「何だお前怖い人かと思つたじやないか。話せるじやんか？」

イタリアはわざわざ今まで泣いていたのが嘘のようになってしまった。
俺は呆れて、警戒を解きかけた。が…

俺「ハツ！？」

すぐに思い直し奴から離れた。

俺（そうかー？これは震か！震の無むなうな顔をして隙をつくつも
りなんだ…。なんて奴だ！…）

イタリア「お前とは友達になれ（ペコッ）

俺は持っていた銃のストックをイタリアの頬に押し付けた。

俺「俺は騙されんぞ！ くたばれパスタ野郎！」

イタリア「ぎやああえあああ……」

「のとき俺は
この出会いが
自分の運命を
こんなにまで
変えるとは
思っていなかつた……。

第一話　WW?～全ては「」から始まった?～（後書き）

感想書いて下さると、嬉しいです。

次は、日独伊三国同盟の出前まで書く予定です。

第二話 WW? ハドイッシュと捕虜のイタリアー（前書き）

タイトル通り、捕虜になつたイタリアの話です。終わり方が微妙です。すみません…。

第三話 WW? ドイツと捕虜のイタリアー

それからドイツはイタリアを捕虜にした… のだが…

ドイツ「お前逃げ出す気はないのか?」

イタリア「何で? だつてこじり飯出るし戦わなくつていいし、俺ここ好きだ~。」

ドイツ「ダメだ!! 兵ならばたとえ槍や火やフランス人が飛び交う中でも、逃げ出そうと懸命な努力をするものだ。おい、聞いてるのか!? 寝るな! お前を見張る身にもなれ! 暇すぎるんだだ!!」

ドイツが説教をしてくる中で、イタリアはぐで~、となつて寝ていた。

ドイツ「ほら、見てみる~。牢屋のドアが開いてるぞ? 逃げ出さなくていいのか~?」

ドイツは牢屋のドアを【ひびき】開けた。

す~(イタリアが起き上がる音)

かわらかー（イタリアが外に出る音）

かわらかー（イタリアが牢屋に床つて来る音）

くらくらーくらくらー（イタリアが牢屋に床つて来る音）

数日後…

ドイツ「部下」「ドイツさん、お畠さまのです。」

ドイツ「ん?俺にか?特に心当たりはないのだが…。」

ドイツは部下の言葉を聞き、眉をひそめる。

ドイツの部下「はい。あなたと…イタリア宛てです。」

ドイツ「何…?」

イタリア「ヴェ?俺宛て?」

イタリアは現在、ドイツの捕虜である。そのイタリア宛ての荷物ならば、何か危険なものが入っている可能性が高い。

ドイツ「それで…誰から送られてきたものなんだ?その荷物は?」

ドイツは警戒しながら部下に聞いた。

ドイツの部下「えつと、ちよつと待って下せ。…畠さまは「シチリアーノ」と書いてあります。」

イタリア「わーい シチリアからだ。」

イタリアはドイツの部下からわざと荷物を受け取り、開封した。

ドイツ「…貴様! 何をしている! ?」

ドイツはすぐにイタリアから荷物を取り上げ、中身を見た。

ドイツ「…なんだ? これは…?」

イタリア宛ての荷物の中には…

- ・パスタ
- ・サッカーボール
- ・ワイン
- ・トマト
- ・オリーブ油 など

と手紙が入っていた。

ドイツは手紙を手に取り、読んだ。

ドイツ「えー、なになに…

ヴェニスお兄ちゃんへ

お元気ですか? 私は元気です。この前会ったときに頼まれたボルやパスタを送ります。早く帰つて来てね。あんまりドイツさんに

迷惑かけちやダメだよ。
シチリアーノよりへ

…」の前？

イタリア「やつた。パスタパスタ　トマト　アタマアタマ
ドイツ「へーの前ひたとめくとせじうにひつだ?
イタリアは早速、送られてきたトマトを食べていた。

ドイツ「…おー。」

イタリア「まあほ（なあほ）?」

た。

ドイツ「へーの前ひたとめくとせじうにひつだ?
イタリア「（モグモグ、ぐぐんー）うふ、この前ドイツが俺を外に

出してくれた時に会つたんだよ。俺のこと助けに来てくれたみたい
だつたけど、ここ西心地がいいからそのまま残る、て言つて帰つて
もうつたんだ~。」「

ドイツ「何だとー?…とこつかそれなら普通、一緒に逃げるだろー。
」

イタリア「だつて俺ここ好きだもん」

ドイツの突っ込みに、イタリアは「ゴーゴー」と笑いながら答えた。

ドイツの部下「あの……お取り込み中のところすみませんが、ドイツさん宛ての箱がござりしましようか?」

ドイツ「ああ……待たせてしまなかつたな。やうだな、取り敢えず受け取つておく。」

ドイツは部下から箱を受け取つた。

ドイツの部下「では、失礼しました(ビシッ)

ドイツ「うむ。(ビシッ)

ドイツヒューリックの部下はお互いに敬礼を交わした。そして、ドイツの部下は牢屋をあとこした。

ドイツ「ふむ、どうしたものか……。」

ドイツは腕をくみ田の前の箱を見つめた。

ドイツ（やはり危険物の可能性があるから開けずに捨てるべきなんか？いや、でも危険物ならそれはそれでどうにかしなければいけないな…。）

ドイツ「…よし。」

ドイツは箱を開ける決意をした。

ベリベリツ パカツ

ドイツ「…？」…「…」

箱の中には

- ・胃薬
- ・頭痛薬
- ・古びた短剣
- ・手紙

があった。

ドイツはまた手紙を手に取り、読んだ。

ドイツ「また手紙か…。なになに…

>ドイツさん<

兄がお世話になつておつます。ドイツさんは眞面目な方だと聞いたので、兄のことで色々と苦労していると思い、頭痛薬と胃薬を送りました。あと、短剣は私達の祖父である「ローマ帝国」^くが使っていた物です。ドイツさんは祖父を尊敬していると耳にしたので同封しました。良かつたらどうか。兄を宜しくお願ひします。

シチリアーノより

「ローマ帝国が使つていた短剣^くだと…？これが…。」

ドイツは古びた短剣を取り、じつくりと眺めた。刃渡りは約15cm。古びてはいるが、きちんと手入れされていたのだらう。刃は欠けておらず、切れ味は良さそうだ。

イタリア「あつ！それローマじいちゃんのだ。」

ドイツ「何…？（どこから）これは本邦ローマ帝国の…。」
剣を指さして言った。

ドイツは改めて短剣をじっと見つめる。
イタリア「あつ、そうだねえドイツ、一緒にサッカーしようよー。せつかくシチリアが送つてきてくれたんだし。俺、今暇なんだ。ドイツも暇でしょ？やろうよサッカー！ねえねえドイツ？やろうよー。

ルウ 「

ドイツ「お前は……。」

ドイツはナトを向き、ふるふると震えだす。

ドイツ「少しは自分の立場を考える——————。」

数日後ドイツは薬を送ってくれたシチリアに感謝するのだった。

第三話 WW? ハドイッシュと捕虜のイタリアー（後書き）

感想やポイントも貰えると嬉しいです。
次までWW?の話の予定です。

第四話 WW? ～イタコアの魔術(?)～（前書き）

すみません…

この話でWW?の話を終わらせるつもりだったんですが、できませんでした。

第四話 WW? ハイタロウの帰宅(?)

シチリア side

私『ヴェニスお兄ちゃん…元気かな?』

私は机に向かい、書類から一冊を離して呟いた。

現在ヴェニスお兄ちゃんはドイツさんの捕虜になっている。

先日、私はヴェニスお兄ちゃんを迎えてドイツさんの家へ行き、偶然にも会つことができた。でもヴェニスお兄ちゃんは「ドイツの家は居心地がいいからこのまま残る。」と言い、私はヴェニスお兄ちゃんから欲しい物を聞いたあと家へと帰つたのだ。

もちろん私はヴェニスお兄ちゃんに帰つて来て欲しかつたが、そうするとまたヴェニスお兄ちゃんが危ない目に遭うかもしれないと思い、しぶしぶ家へと帰つたのだ。

私『会いたいなあ…。』

「ンン…」

誰かが私の部屋の扉をノックした。

私『ビーナス。』

ガチャツ

シチリアの部下「失礼します。」

部屋に入つて来たのは私の部下だった。

シチリアの部下「シチリアさん連絡です。」

私『なあに?』

シチリアの部下「あなたの兄…イタリア・ヴェネチアーノが帰つて来ましたよ。」

私『…? 本当…?』

私は机から身を乗り出して聞いた。

シチリアの部下「ええ。何でもドイツから箱に入れられて送られて來たらしいです。あと、変な歌を歌つてたらしいですよ。」

私『へ、へえ。 (「ドイツードイツードイツはい」ところだよー
「つてこうあの歌かな?」)』

私はあの歌を思い出し、思わず笑いそうになるのを必死で抑えた。

シチリアの部下「今、下に居ると思いので会こに行つたらどうですか？」

私は『そうだね。ちょうど仕事も一段落ついたところだし会こに行こうかな。』

シチリアの部下「では、いつの書類は提出しておきますね。」

私は『うん、ありがとうございます。』

シチリアの部下「……かし」とまつました。」

私は『？顔、赤いよ？大丈夫？熱はない？』

シチリアの部下「だ、大丈夫です。」

私は『そりゃよつと待つて。』

私は机の引き出しから風邪薬と解熱剤を取り出した。

私は『はい。これ、具合が悪くなつたら飲んでね。』

私は薬を部下に渡した。

シチリアの部下「ありがとうございます。」

彼は私から薬を受け取り、ポケットにしまった。

シチリア『じゃあ、書類お願いしてもいいかな?』

シチリアの部下「はい。」

シチリア『よろしくね。』

そう言つて、私は部屋をあとにした。

階段を降りると、ギヤーギヤーと騒ぐ声が聞こえてきた。

ロマーノ「……だいたいお前は何でシチリアーノが迎えに行つた時
と一緒に帰つて来なかつたんだよ!」

イタリア「ヴェ…だつてドイツの家、居心地が良かつたんだ。だから…」

ロマーノ「こひちはお前が居ないせいで仕事が増えて大変だつたんだぞ！」

イタリア「え！？ 兄ちゃんが仕事？」

私『さすがに私一人じゃ無理そつだつたから、手伝つてもらつたんだよ。』

イタリア「！？ シチリアー！」

私『お帰り、ヴェニスお兄ちゃん。』

私が笑いかけると、私の突然の登場に驚いた顔をしていたヴェニスお兄ちゃんも笑顔になつた。

イタリア「うん！ ただいま。あつ、 そうだー！」

私『？』

イタリア「ただいまのハグ」

そう言つと、ヴェニスお兄ちゃんは私にハグをしてきた。

私『みゅー?』

私は驚いて、思わず奇声を発してしまった。

ロマーノ「おこ、シチリアーのから離れる一驚いて固まつてんだ
る。」

私『…………。』

これなりのこと私は固まつてしまつていた。

イタリア「だつてシチリア可憐じんだもん 兄ちゃんもそつ思わな
い?」

ロマーノ「…………まあ……な。」

私『(ハジ) そんなじと満ててあの、ガニースお兄ちゃんなんが
うじこかな?』

イタリア「ウニ~。」

ガニースお兄ちゃんは少し名残惜しそうに私から離れてくれた。

私『ありがとう。……はあ、私もなんが慣れないことないな。ハ

グに。』

イタリア「シチリア、ハグがくるのを分かつてたら平氣なのに、いきなりだと固まっちゃうもんね。」

ロマーノ「あと、知らないヤツとのハグもな。」

私『うん。…でも、昔はハグ 자체苦手だったからマシになつた方だと思うよ。』

イタリア・ロマーノ「そうだね〜／だな。」

昔は本当にハグが苦手で、異性からハグをされるといつも奇声を挙げたり、泣いたりしてしまっていた。そして、ひどいときは相手を突き飛ばしていた。そのうちの7割以上はフランス兄さんだった気がする…。

私『それにしても。』

イタリア・ロマーノ「？」

私はお兄ちゃん達の顔を交互に見た。

私『じうして3人揃うのって久しぶりだね。』

私が言つと、お兄ちゃん達はお互いに顔を見合せた。

イタリア「うん。」

ロマーノ「かもな…。」

最近は私とロマーノお兄ちゃんは別々に仕事、ヴェニスお兄ちゃんはドイツさんの捕虜、で兄妹で集まれる機会がなかった。

私はせっかく久しぶりに3人揃つたんだし、みんなで『飯作り』
『…』

イタリア「わ〜、それいいアイデアだと想つよーね、兄ちゃん。」

ロマーノ「…悪くはない。」

シチリア『じゃあ、決まりだね』

イタリア「パスタ作る?—パスタ!—」

ロマーノ「トマト料理は絶対に外せねえな。」

お兄ちゃん達はそれぞれ自分の好きな料理を希望してきた。

私は『なら…ボロネーゼなん?』

ロマーノ「いこや。」

イタリア「シチリアは何が食べたい？」

私『私？私は…カッサーラが食べたいな。』

カッサーラとは…シチリア地方のお菓子のことです。チーズに砂糖漬けの果物などを加えたクリームと、スポンジ・ケーキで作ります。アイスクリームに仕立てたものもあります。

イタリア「それじゃあ、デザートにカッサーラを作ろっか。」

私『うん』

ロマーノ「…で、材料は揃つてんのか？」

イタリア・私「『あつ…』」

ロマーノ「つたく…。俺が買つてきてやるからその間にお前達は準備してろ。」

イタリア「はーい」

私『ありがとうございます、ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノ「ふん…。」

それから、ロマーノお兄ちゃんは材料を買いに行き、私達は準備をした。

お兄ちゃんは1時間程で帰つて來た。

私『お帰り、ロマーノお兄ちゃん。』

ロマーノ「ああ、ただいま。…? おい、ヴェネチアーノはどうした?
?」

私『えーと…ヴェニスお兄ちゃんはその…準備が終わったから、シ
エスターを…。』

ロマーノ「あ…? …」の、ふざけやがつて…あのバカ弟…
!』

私『え…? ちよつ、ロマーノお兄ちゃん! ?』

その後、ヴェニスお兄ちゃんはロマーノお兄ちゃんといつてり絞
られたのだった。

でも、そのやり取りもまた久しぶりで、面白かった。

夜は計画通り3人で夜ご飯を作った。

ご飯を食べる時にヴェニスお兄ちゃんは、ドイツさんの家に居た
時のこと話をしてくれた。お兄ちゃんの話によると、ドイツさんは
おじこちゃんの短剣を喜んでくれてたらしく。良かった。

私『今日は本当に楽しかったなあ。』

私は食器を洗いながら呟いた。

私（私の記憶が正しいなら、ヴュニスお兄ちゃんはまたドイツさん
の家に行っちゃうんだろうな… 今度は出稼ぎに。）

やう思ひと何だか少し悲しくなり、小さく俯いてしまった。

私
でも…

私は顔を上げ、小さく微笑んだ。

私（その時は帰つて来たときのために、材料を買つておいつかな
）

私は1人で勝手に新たな計画を立てるのだった。

第四話 WW? イタリアの帰宅(?) (後書き)

次こそWW?を終わらせます!

第五話　WW?　WW? 終了! ドイツと友達に〜（前書き）

久々の更新です！！

長い間、放置してすみませんでした。^(_ _)^

第五話　WW?　～WW?終了!～ドイツと友達に～

三人称 side

前回の話でイタリアは（ドイツから強制送還され）帰宅したが、今度は出稼ぎのためにドイツの家へ行ったのだった。それから数日が経つたある日のこと

イタリア宅

シチリア『ロマーノお兄ちゃん!』

シチリアは勢いよくロマーノの部屋のドアを開けた。

ロマーノ「おわっ!…いきなり入って来るな!びっくりしちゃうが。」

シチリアはドアをノックせずに開けたので、突然ロマーノの前に現れる形になり、ロマーノはとても驚いていた。

シチリア『あつ…』めんなさい。』

ロマーノ「つたく…で、どうした? シチリアーノ。」

シチリア『うん。あのね、ヴェニスお兄ちゃんから手紙が届いたよ。

1

ロマーノ「バカ弟からか?」

シチリア『バカつて…（汗）バカは外そうよ、バカは。』

「マーノ……ちつ、分かつたよ。」

シチリア『ありがとう。…じゃなくて、ドイツさんの家に出稼ぎに行つたヴェニスお兄ちゃんから手紙が届いたんだよ！－一緒に読も

シチリアは持つてゐる手紙を嬉しそうにヒラヒラとロマーノに振つて見せた。

ロマーノ「ああ。」

シチリアの無邪気な笑顔と行動にロマーノは小さく微笑み、頷い

た。

シチリア『じゃあ、読むね。えっと、なになに…

「兄ちゃん」とシチリアへ

俺、ドイツの家でお札作る仕事始めたよ。

聞いて驚くなよ！』

俺の給料は9億マルクです。

あつ、でも卵が32億マルクです。
びっくりだよね！』

……。

ロマーノ「…………。」

シチリア『…………。』

ロマーノ「……あのバカ！……やつぱあこいつはバカ弟だ……ビツ考えて
もおかしいだろ！（怒）」

シチリア『はは……（苦笑）』

イタリアからの手紙にロマーノは怒りながら突っ込み、シチリア
は苦笑していた。

シチリア『といふかドイツさん、ヴニスお兄ちゃんに仕事くれた
んだね。またドイツさんに薬、送つておくかな……。』

シチリアはイタリアに振り回されるドイツを想像した。

シチリア『ドイツさん大丈夫だよね？…………大丈夫、かな？』

だが結局、シチリアはドイツに前にも送った頭痛薬と胃薬のセットを送つたのだった…。

それから色々あつて、イタリアとドイツは同盟を結び友達になった。

イタリア「ドイツーディツー！…」

イタリアは街を歩いていたドイツを追いかけ、後ろから声を掛けた。

ドイツは「はあ…」と大きく溜め息をつきながら振り返った。

ドイツ「何だイタリア？まさか、また靴ひもが結べないとか言い出すんじゃないだろうな？」

イタリア「さよ、今日は違うよーあのね俺、ドイツに紹介したい人がいるんだ」

ドイツ「俺に紹介したい人?...で、そいつは何処にいるんだ?」

イタリアの近くには誰も居ない。ドイツは少し嫌な予感がした。

イタリア「え~っと、ほぐれちゃった」

ドイツ「...まあ?」

イタリア「可愛い女の子がいたからナンパしてたらいつの間にか居なくなつてたんだ~。どうしよう?」

イタリアは「ハハハ」と笑いながら首をかしげてドイツを見た。

ドイツ「...因みにその時、お前は前と後ろどちらを歩いていた?」

イタリア「うしろー」

ドイツ「ならば、それはそいつがは居なくなつたんじゃなくてお前が居なくなつたんだるーーー」

イタリア「ガハー?」みんなさこい!みんなさこーーー何でもするから怒鳴らないでーーー」

泣き出すイタリア。

? ? 『 ガハニースお兄ちゃんーー。』

ドイツ「ん？」

ドイツがイタリアに説教をしてくると、栗色の髪と瞳の少女がイタリアの元へ走ってきた。

? ? 『 ふう … 良かつた、見つかって。』

イタリア「シチリアー！」

ギュッ

イタリアは半泣きのままシチリアに抱きついた。

シチリア『 ? … よしよし。（なでなで』

シチリアは何故イタリアが泣いているのか分かっていないようだつたが、苦笑しながらイタリアを宥め始めた。

シチリア『それにしても驚いたよ。ヴェニスお兄ちゃん、気が付いたら居なくなつてゐんだもん。』

イタリア「ヴェ…。」めんなさい。」

イタリアはショボーンとして、シチリアに謝った。

ポンポンッ

イタリア「ヴェ?」

シチリア『まあ、いつも会えたんだからそんなに落ち込まないで。ね?』

イタリア「……うんー、ありがとウ、シチリア」

ドイツ「…………。」

イタリアとシチリアが会話をする中、ドイツは一人だけ蚊帳の外に置かれていた。

イタリア「あつ、そうだ!ドイツ、紹介するね 僕の妹のシチリアだよ かわいいでしょ で、シチリア、こつちは俺達が新しく同盟を組んだドイツ。すっげーいいやつなんだよー二人共、仲良くしてね」

シチリア『だから、かわいくないって……。(汗) はじめまして、

ドイツさん。私はイタリア・シチリアーノです。シチリアと呼んで下さい。WW?のときせ、兄がお世話になりました。』

ドイツ「ふむ、俺はドイツだ。よろしく頼む。…WW?のときに送つてくれた薬はとても役に立つた。礼を言ひ。」

シチリア『そうですか。（つてことはやつぱりヴヒースお兄ちゃん、ドイツさんには迷惑かけちゃつたのかな…。）お役に立てて良かつたです。』

ドイツ「あと、その…。」

シチリア『?』

ドイツ「…ローマ帝国の使つていていたという短剣に関しても…礼を言ひ。ありがと。」

シチリア『いえいえ、喜んで頂けて何よりです。』

ドイツ「しかし良かつたのか？あんな大切そうな物を敵だつた俺なんかに渡して…。」

ドイツは眉をひそめながら、シチリアに問う。

シチリア『大丈夫ですよ。だつてドイツさんはプロシニア兄さんの弟さんですか？』

一ツ「ひとつ微笑むシチリア。」

ディッシュ「……？ 兄さんを知つてこいるのか！？」

シチリアの予想外の返答にディッシュは驚き、目を僅かに見開く。

シチリア『ええ。知つてるも何も私、12世紀の終わり頃はプロシア兄さんにお世話をついてましたから。』

シチリアは若干懐かしむように言葉を続けた。

シチリア『あの頃はよく、プロシア兄さんに剣を教えてもらつてしまつた。…プロシア兄さん、凄く強かったです！…』

ディッシュ「やうか…。」

ディッシュは兄を讃められ、どこか嬉しそうだ。

シチリア『…ディッシュさん。』

ディッシュ「？ 何だ？」

シチリアはそつと右手を差し出した。

シチリア『今日から私達は友達です。これから宜しくお願ひします
ね』
『口ッ』

ドイツ「／＼／＼あ、ああ。宜しく頼む。」

ドイツはシチリアと手を繋いだ。

ドイツ「……おかしい。」

シチリア『…ドイツさんもそう思いますか？』

ドイツ「シチリアもか。やけに静か…ではないか？」

シチリア『…「ウ」って声が聞こえませんね。』

一人はハッとして、周りをキョロキョロと見回す。

ドイツ「イタリアが居ない…。」

シチリア『一ドイツさん、あれって…。』

シチリアが指差した方向には…

イタリア「ねえねえ、セヒの可愛にきみー今ヒマへよかつたら俺と
お茶しない?俺、いい店知つてゐんだ 行こりつよー。」

女の子にナンパしているイタリアの姿があった。

シチリア『またお兄ちやんは…。』

ドイツ「イタリアー——————！」

シチリア『ドイツさんー?ちよつと、待つてくださいよ。ドイツを
一ーん!』

ドイツはイタリアの元へ猛スピードで走つて行き、シチリアはドイツを必死に追いかけた。

この後、イタリアがドイツに説教されたのは言つまでもない。

第五話　WW?　～WW?終了!～ドイツと友達に～（後書き）

次話は日独伊三国同盟ね話です。

明日、更新の予定です。

第六話 日本とドイツとイタリア兄弟と（前書き）

予定通り、更新です。

日独伊三ヵ国同盟を結びます。

第六話 日本とドイツとイタリア兄妹と

「… どうわけで俺たちの仲間になるやつらを連れて来た。」

日本「イタリア君にシチリアさん…ですか？」

ドイツ「ああ。だがシチリアは遅れて来るらしい。」

日本「そなんですか。それは会うのが楽しみ…と言いたいのですが、さつきからそこに居るどう見ても不振人物の彼とは別人ですよね？」

そう言つ日本の視線の先には女性に囲まれてへラへラしているイタリアがいた。

ドイツはそんなイタリアを見て、眉間に手をやりながら呟えた。

ドイツ「俺も信じたくないが…あれなんだ。」

日本「日本の中」

スツ（日本がイタリアの頭の上にみかんを乗せる音）

ネコ「ニヤーン。」
イタリア「…ヴェー…ズズ」

日本「あの…ここに調印したんですけど。」

ドイツ「ああ…。そこに置いておいてくれ。」

現在、イタリア・ドイツ・日本の三人はこたつに入っている。イタリアは頭にみかんを乗せて（てが日本が乗せた）ネコと一緒に寝ており、ドイツはドイツで読書をしている。日本は調印をしたので、これからどうしようかと考えていた。

「…」

玄関の戸が叩かれる音がした。

日本「…おや…どう様でしょ?」

日本はこたつから出て、玄関へと向かった。

私『…あれ？ 聞こえなかつたのかな？』

私は今、日本さんの家の玄関前に立る。一度ノックをしてみたが返事がない。

私（やつぱり、日本さんの家はいいな）。懐かしい感じがするし、何より落ち着く…。）

私は日本さんの家を眺めながら、ふと思いついた。

私（そういうえば、紗弥加と琴美も和室の方が好きでよく三人で畳に寝転がって「ヘタリア」読んでたな…。）

私はこの世界に転生する前のことをしみじみと思つていていた。すると…

日本「あの… どなたでしょうか？」

日本さんが玄関を開けて、私に問い合わせてきた。

私『えっと、これは日本人のお宅ですか?』

日本「ええ、私が日本ですが…。あなたは?」

私『はじめまして。私はハイタリア・シチリアーノくといいます。先にそちらにお邪魔しているハイタリア・ヴェネチアーノくの妹です。』

私が応えると日本人は納得したような顔をした。

日本「ああ、あなたが…。まあ、立ち話もなんですしどうぞ御上上がり下さい。」

私『あつ、はい。ありがとうございます。では、お邪魔します。』

日本人に促され、私は家に上がらせもらつた。

それから私は日本人に案内されて一人が居る部屋に着いたのが…

私『……ドイツさんは読書、威尼斯さんも何やつてるんですか?』

部屋に入るところの中でドイツさんは読書、威尼斯さんも何やつてるんですか?』

んはシエスタ、といふ何とも言えない光景があつた。

ドイツ「ああ、シチリア。予想以上に早かつたな。てっきり来るのは明日になるとと思っていたのだが?」

私『ええ、私もそのつもりだつたんですが、今回のマフィアの人達は話が通じる人達だったので、ドンパチせずに鎮圧できましたんです』

ドイツ「や、そうか。それは良かったな…。」（汗）

私『はい!』

こたつに入りながら、嬉しそうに言つ私を見て、ドイツさんは苦笑していた。

私『ドイツと一緒にドイツさん。』

ドイツ「なんだ?」

私『ヴュニスお兄ちゃんは調印しましたか?』

ドイツ「…いや、まだだ。イタリアはこたつに入るとすぐに寝てしまつてな。起こそうとしたんだが、日本が「起こしては可哀想だ」と…。」

私『…そうだったんですか。じゃあ、私が代わりに調印しておきま
すね。』

ドイツ「頼む。俺と日本の調印はもう済ませてある。終わったら、そこに置いておいてくれ。」

私『了解です。』

私はペンを手に取り、書類を書き始めた。

私『…………よしつ。』

私は書き終わった書類を先に調印していたお一人の書類の上に重ねた。

私（日本さんはどこに行つたんだろう？）

日本さんは私を案内してくれた後、何処かへ行つてしまつていた。
探しに行こうかな、と私が思ったそのとき

日本「お待たせしました。」

日本さんがお茶とお菓子を持って戻ってきた。

日本「調印は済んだんですね。」

日本人さんはお茶を配りながら、いたつの上に重ねてある書類を見て言った。

私は『ええ。…あつ、ありがと』『やれこませす。』

日本「いえいえ。」

日本人さんはみんなにお茶を配り終えると（ウニースお兄ちゃんは寝ているが）、そういえば…と私に話しかけてきた。

日本「まだ、ちやんとした自己紹介をしていませんでしたね。」

私は『そうですね。』

日本「では、僭越ながら私から…私は日本と申します。以後、お見知り置きを。」

日本人さんは私に向かつて頭を深々と下げた。

私は『私はイタリア・シチリアーノです。シチリア、と呼んで下さい。これからよろしくお願ひします。』

私は日本さんに手を差し出した。

日本さんは私の手を不思議そうな顔で見た。

私『握手…ダメですか?』

日本「い、いえ。そうではないんです。その…慣れてなくて。」

日本さんも恥ずかしそうに手を差し出した。

私『改めてようこそお願いしますね。日本さん。』

日本「はい。よろしくお願ひします。」

私達は握手をした。

ドイツさんはそんな私達を温かい目で見つめていた。

イタリア「…パースタ…」

日本独伊三国同盟締結…

第六話 日本ピュイッシュとイタリア兄妹と（後書き）

ずっと放置してすみませんでしたm(—_—)m

掛け持ちしてゐ【へタ鬼】の小説ばかり書いてました！

それで申し訳ないんですけど、これから、JUTちの方の小説を放置してしまつたことが多くなるかもしません。

最低、1か月に1回は更新したいとは思っています。

身勝手なことをしてしまい、本当にすみません(^_^。)

特別話 クリスマスパーティー その1（前書き）

クリスマスなので書いてみました。
100%オリジナルの駄文です。

特別話 クリスマスパーティー その1

シチリア side

今日は12月24日、クリスマスイブだ。

今年のクリスマスイブはアメリカさんがたくさんの方々をお招きして、アメリカさんの家でクリスマスパーティーすることになった。

ざわざわざわざわ

私は目の前にある巨大なクリスマスツリーを見上げながら呟いた。

私『わ～…アメリカさんの家のクリスマスツリー、凄く大きい。』

ロマーノ「…だけえ。」

イタリア「すげー！」

スペイン「親分、ビックリやわ…。」

ドイツ「確かに…でかいな。」

日本「……。（カシャツカシャツ）

お兄ちゃん達もツリーに驚き、各自の感想を述べていた。
でも日本さんだけは無言でカメラを連写していく。

私はわざわざ『真』を撮っている日本さんと話しがけた。
私『あつ日本さん後での写真、割り増してもこいです
か?』

日本「ええ、構いませんよ。… 艰かつたり監さんの『真』もお取りしまじょうか?」

イタリア「本当?」僕と兄ちゃんとシチリアの二人で撮って

「

日本「はい、良いですよ。」

イタリア「わーい ありがと!、日本。さあ、兄ちゃん! シチリア
ー!」

ロマーノ「なつー! 引っ張るなー!」

、ヴィニスお兄ちゃんはロマーノ兄さんの腕を掴んで、ツリー
の前へと走り出した。

私『ちよつーお兄ちゃん、あんまり走つたら転け…』

ツルンッ

全員「『あつーー』」

イタリア「ヴェッ…？」

ロマーノ「ちがつーー…」

二人は見事に滑り、豪快に転け…

ドイツ／私「『イタリア／お兄ちゃんーー』」

ダツー！

パシッ

ドイツ／私「『ふう…。』」

…そこになつたが、ヴェニスお兄ちゃんをドイツさんが、ロマーノお兄ちゃんを私が後ろから支えたので二人共なんとか転げずに済

んだ。

三人称 side

イタリア「ヴェー…危なかつたあ…ありがとうーー。」

ドイツ「全く…今後、気を付けるよー。」

イタリア「はーい」

ドイツの注意にイタリアは手を挙げて、返事をした。

シチリア『大丈夫? ロマーノお兄ちゃん?』

ロマーノ「あ…ああ。」

シチリア『良かつた。』

シチリアはホッと胸を撫で下ろした。

ロマーノ「……シチリアー。」

シチリア『？なあにってロマーノが兄ちゃん。』

ロマーノは少し恥を覺えながらシチリアに話しかけた。

ロマーノ「……その……あつがとな。」

ロマーノは恥ずかしそうに、シチリアに感謝の言葉を述べた。

シチリア『…ふふ、ビウいたしました。』

そんなロマーノにシチリアは微笑みかけた。

じ――――

ロマーノとシチリアは視線を感じて後ろを振り返った。

スペイン「ロマーノもシチリアもかわええなあ～」

日本「和みますね。」

ドイツ「…ロマーノもあんな表情をするのだな。」

イタリア「ヴニーヴ」

振り返ると、皆が一人のやり取りを見ていた。同時に転げそろってなっていたイタリアと助けたドレイツまでもだ。

シチリア『…………。（ニ）ロッシ』

ロマーノ「……な……何見てんだ！－ここにさわるーーー！」

視線に気付きシチリアははにかみ、ロマーノは顔を真つ赤にした。

スペイン「ははっ、ロマーノがトマトみたいになりおった」

ロマーノ「スペイン、てめーーー！」

シチリア『まあまあ、ロマーノお兄ちゃん、落ち着いて。』

今にもスペインに殴りにかかりそうなロマーノをシチリアが後ろから羽交い締めにして押さえる。

ロマーノ「離せーーー！スペインを一発殴らぬーと気が済まねえーーー！」

シチリア『ダメだつて…』

バッ

全員「『…?』」

突然、会場の灯りが消え、辺りが真っ暗になる。

先程までざわざわしていた会場が一瞬で静まり返る。

パッ

そして、一ヶ所だけにスポットライトが当たられた。

アメリカ「レディース&ジェントルメン…！」

スポットライトに照らされた場所には、アメリカがサンタクロースの格好をして立っていた。

アメリカ「今日は集まってくれてありがとう…！クリスマスパーティーを始めるぞーー！」

ワーワーワーワー
ガヤガヤガヤガヤ

アメリカ「よーし！まず始めに皆で乾杯をしよう 皆、飲み物を持つてくれ。」

皆が飲み物を手に取る。

アメリカ「…皆、持つたね？じゃあ行くぞ！…乾杯！！」

全員「カンパーアー！」

カンツ カンツ
カツンツ

あちこちでグラスのぶつかる音が響いた。

アメリカ「HAHAHAHA 皆、今夜は楽しんでくれー！」

ガヤガヤガヤガヤ
ワーワーワーワー

シチリア『始まつたね、クリスマスパーティー』

シチリアは後ろを振り返る、が…

シチリア『…あれ？ 駐ま？』

誰も居なかつた。

その頃、駐はといふと…

イタリア「パスタア～～～」

ドイツ「待て！ イタリアー！ 勝手に行動するなーー！」

日本「イタリア君、ドイツさん、待ってくださいーー！」

イタリアはパスタが置いてあるテーブルへと走り、ドイツはイタリアを追いかけ、日本は二人になんとか追いつこうとしていた。

スペイン「あつ、チユロスやー！」

ロマーノ「おい！ スペイン待ちやがれーー！」

スペインはチュロスを見つけて、嬉しそうに走って行った。ロマーノがスペインを追いかける。

ロマーノ「つたく…シチリアーノ、お前からも注意してくれ。」

返事はない。

ロマーノ「？シチリ…！？」

ロマーノが後ろを振り返った、が…

ロマーノ「シチリアーノ！何処に行つた！？」

四人「えつ…！」

枢軸トリオ&スペインはロマーノの言葉を聞いて、よしよしと笑いついた。リニアとほぐれてしまつたことになつたようだ。

イタリア「ヴァ…シチリアー（泣）

「…」

日本「まあまあ、ドイツさん。取り敢えず今はシチリアさんを探しましょ。」

ドイツ「…そうだな。」

三人はシチリアを探しに行こうとした。

スペイン「まあ、待ちい。」

スペインが三人を引き止めた。

日本「何でしようか？スペインさん。」

スペイン「シシリーやたらたぶん大丈夫や。たまには一人で好きに行動させてみるのもええと思うで？な、ロマーノ」

四人がロマーノを見る。

ロマーノ「…俺もスペインに賛成だ。」

軽く視線を反らしながらロマーノもスペインの案に賛成した。

スペイン「なら、シシコーに」自由に行動してええよ』ってメール送つとくな。』

シチリア side

私『お兄ちゃん達、何処行つたんだろう?』

お兄ちゃん達とはぐれてしまつた私は、一人うなづいていた。

（　）

と不意に鏡 リン&鏡 レンの「からくつぽーすと」が流れ出した。

私『あつ、メールだ。』

私はケータイを取りだしメールを確認した。

私『なになに…

「シシリーへ
『めんな〜。』

親分達、勝手に動いてシシリーとはぐれてしまた。

だからシシリーも親分達を気にせずに動いてええよ

帰りにまた合流しような。何か困ったことがあつたら、メールし

い。すぐに駆けつけるで

ほな、またな。スペイン親分よりく

…じゃあ、お言葉は甘えてあつちひつち行かせて貰おうかな。『

ケータイを閉じると私は特に目的もなく、歩き始めた。

特別話 クリスマスパーティー その1（後書き）

もしかしたら、クリスマスが終わるまでに終わらないかもしだま
せん。

すみません m — — m

特別話 クリスマスパーティー その2（前書き）

短いです。
新キャラが3人出ます。

特別話 クリスマスパーティー その2

シチリア『さて、と。どうしようかな…』

一人で行動することになったシチリアは何をするか迷っていた。

シチリア（誰かいないかな？）

その場でキヨロキヨロとするシチリア。

? ? 「あら、シシリーじゃない。」

? ? 「あなたが一人でいるなんて珍しいですね。どうしたんです？」

? ? 「ヴェストやスペイン達と一緒にやなかつたのか？」

話し掛けられてシチリアは振り向いた。

シチリア『あつ…こんばんはハンガリーさん、オーストリアさん、
プロシア兄さん。』

振り向くとハンガリー、オーストリア、プロイセンが立っていた。

ハンガリー「こんばんは、シシリー　でも本当に珍しいわね？あなたが一人なんて。」

ハンガリーもオーストリア同様に、普段はイタリア兄弟のどちらかと行動しているシチリアが一人でいることに疑問を感じ、聞いてきた。

シチリア『実は　説明中　といふこととして。』

オーストリア「あなたも大変ですね。」

額に手をやり、シチリアに同情の眼差しをおくるオーストリア。

シチリア『でもまあ…楽しそうですよ。』

プロイセン「ケセセセセ…まつ、頑張りな。」

プロイセンがシチリアの頭をワシャワシャと撫でた。

シチリア『みゅー…あつー（バッ）』

シチリアは慌てて口を手で覆つた。

プロイセン「おっ シシリーのその声、久しぶりに聞いたな。」

シチリア『……聞かなかつたことにじて下さい…。』

恥ずかししそうにシチリアは顔を赤らめながら俯いた。

ハンガリー「あら、私は好きよ シシリーのその声。」

シチリア『……。（顔がトマト状態）』

ハンガリーの言葉に余計に恥ずかしがるシチリア。

オーストリア「ハンガリー、シチリアが困っているじゃないですか

…（汗）

シチリア『オーストリアさん…』

オーストリアがシチリアに助け船を出す。

オーストリア「さあシチリア、そろそろ行きなさい。久しぶりに一人になつたんですから、私達だけでなくもつと沢山の方と話してみなさい。」

オーストリアがシチリアに優しく微笑みかける。

シチリア『はい！じゃあハンガリーさん、オーストリアさん、プロシア兄さんまた今度。』

ハンガリー「またねシシリー」

プロイセン「暇だつたら遊びに来い（ハンガリー「行かなくて良いからね」何でだよ！？」

オーストリア「プロイセン、あまり騒がないで下さい。お下品です。」ではシチリア、また今度。」

シチリア『あはは（苦笑）では、さよなら。』

シチリアは手を振りながら三人の元から去った。

特別話 クリスマスパーティー その2（後書き）

次話は新キャラが1人しか出ません。

特別話 クリスマスパーティー その3（前書き）

新キャラが1人出ます。

特別話 クリスマスパーティー その3

シチリア『あつ…あれは…』

シチリアは友人を見つけ、その人の元へ走つて行つた。

シチリア『ポーランド君!』

ポーランドはいきなりシチリアに後ろからポンと肩を叩かれビクッとしたが、相手がシチリアだと気付くと笑顔になった。

ポーランド『あつーシチリアだしーー良かつたしー。ってシチリア一人?珍しくない?』

ポーランドはシチリアにハグしてきて、それからシチリアに聞いてきた。

シチリア『うん、色々あつてね。ポーランド君も一人?』

ポーランド『う、ううん。本当はリトとエストとラトも一緒にやったんやけど、あいつら俺を置いてどつか行っちゃったんだしーーマジありえんくない?』

シチリア『そ、そつか…。（苦笑』

口を尖らせて話し「ワトのバカー！！」と叫ぶポーランドにシチリアは苦笑いした。

ポーランド「しかもここにあるやつ、皆知らん顔ばっかだから俺、動けんで困つとつたんよ。でも、シチリアが来てくれて助かつたら…良かつたら一緒に三人探してくれん？」

人見知りが激しいポーランドはシチリアの服をつい、と引っ張り、上田遣いでお願いしてきた。

シチリア『良いよ（ポーランド君、可愛い…。）』

シチリアはにこりと優しく微笑んだ。

ポーランド「やつたーー。シチリア大好きだしーー！」

ポーランドはピヨンとの場でジャンプして、そのままシチリアに再びハグをした。

シチリア『よしよし…じゃあ、行こうか？』

シチリアはポーランドにスッと手を差し出した。

ポーランド「うんーー。」

ポーランドも嬉しそうに手を取る。

シチリア『ふふ…。』

ポーランド「？シチリア、何で笑つとむん？」

シチリア『何でもないよ』

ポーランド「ふ～ん…ま、いつか セツセツと達見つけよう。」

ポーランドに手を引かれ、シチリアも歩き出した。

シチリア（弟つて、こんな感じなのかな？）

そして一人のバルト三国搜しが始まった。

特別話 クリスマスパーティー ものま（後書き）

短くてすみません…

今更ですが、皆の服を考えませんでした…本当にすみません（
^-^。）

取り敢えず皆、それぞれの国の正装をしてくると思つてください。
(女性陣は皆スカート)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2776y/>

転生先は...ヘタリアの世界!?

2011年12月24日11時46分発行